組織登録からみた広島県における皮膚腫瘍の実態

西　信雄*　　臺丸　裕　　杉山　裕美　　米原　修治　　有田　健一
鎌田　七男　　安井　弥

１．はじめに

広島県腫瘍登録事業（いわゆる組織登録）は広島県医師会を実施主体として昭和 48 年（1973 年）から実施されており、平成 17 年（2005 年）4 月のいわゆる個人情報保護法の全面施行にあわせて、広島県地域がん登録事業と一体化した。この腫瘍登録により病理診断名を確実に把握できることから、広島県地域がん登録において不可欠な存在になっている。

今回われわれは、皮膚腫瘍の実態について、広島県腫瘍登録のデータをもとに解析したので結果を報告する。

２．対象と方法

広島県腫瘍登録は広島県内の医療機関 60 施設の協力を得て、良性腫瘍・悪性腫瘍（血液疾患も含む）の病理組織に関する資料を収集している。病理診断は病理医が必要に応じて標本を再確認して、国際疾病分類腫瘍学第 3 版をもとに部位と組織診断をコード化している。

なお広島県腫瘍登録は、採取された組織からの情報のみを取り扱う点で通常の地域がん登録と性質が異なるため、届出された腫瘍の集計においては、「登録数」、「登録率（人口 10 万対）」と表現する。

３．結果と考察

(1)　新規に登録された皮膚腫瘍登録数の年次推移

1973 年から 2003 年の間に新規に登録された皮膚腫瘍は総数 33,463 例で、良性腫瘍が 26,192 例、悪性腫瘍が 7,271 例であった。また、悪性腫瘍の登録数は男女とも漸増傾向を示したが、良性腫瘍の登録数は過去 10 年間ほぼ横ばいに推移し、女性においては近年漸減傾向にあった。全良性腫瘍と全悪性腫瘍の比は 1：0.3 であり、男女比は、良性腫瘍が男：女=1：1.9 であるのに対して、悪性腫瘍は男：女=1：1 とほぼ同数であった。

(2)　年齢階級別にみた皮膚腫瘍の登録数

登録数を年齢階級別にみると、悪性腫瘍は良性腫瘍に比して男女とも高齢に偏った分布を示し、80 歳代では男性の登録数が若干減少した。良性腫瘍のピークは、男性は 10 歳代と 30 歳代の二峰性を示したのに対して、女性は 20 歳代から 30 歳代にかけてピークのある単峰性を示した。

(3)　年次別にみた皮膚腫瘍の年齢階級別登録数

年次別にみた年齢階級別登録数は、男性の良性腫瘍では 1993～1997 年では 40 歳代が最多で、1998～2003 年では 50 歳代が最多であった。これはいわゆる団塊の世代の加齢と一致していた。一方、女性の良性腫瘍では、どの年次においても 20 歳代と 30 歳代が 1 位と 2 位を占めていた。

一方、悪性腫瘍では男女とも明らかに高齢

*財団法人放射線影響研究所疫学部
〒732-0815　広島市南区比治山公園 5-2

者の登録数が経年的に増加しており、近年は長寿高齢社会の到来とともに急増していた。

(4) 皮膚腫瘍の組織型別登録数（割合）

良性腫瘍は、男女ともメラノサイト腫瘍（色素性母斑等）が最多で、全体では 59.4%であった。さらに、毛包系腫瘍や皮膚線維組織球系腫瘍が続いた。脈管系腫瘍や神経系腫瘍など非上皮性の良性腫瘍の割合は 6.8%であり、良性皮膚付属器腫瘍の 18%より少なかった。

一方、悪性腫瘍のほとんどが表皮癌であり 84.3%を占めた。さらに、悪性黒色腫（5.7%）、皮膚悪性リンパ腫（2.2%）などが続いた。表皮癌における主要組織型別発生頻度は、基底細胞癌、扁平上皮癌、ボウエン病(表皮内扁平上皮癌)の順であり、後二者を合わせると、基底細胞癌：後二者=1：1.5 となった。

(5) 部位別にみた組織型分類の割合

組織型別に発生部位を比較すると、良性メラノサイト腫瘍では顔面、下肢、体幹、上肢の順であり、顔面では男：女=1：2.8、下肢では男:女=1:2.2 で、いずれも女性に多かった。毛包系腫瘍は、上肢、顔面、頭皮に多かった。

一方、悪性腫瘍では、顔面など日光露出部に表皮癌が多かった。また、悪性黒色腫は下肢、上肢、体幹、顔面の順に発生頻度が高かった。

(6) 年次別にみた皮膚腫瘍の組織型別登録数

良性腫瘍の登録数の中では、男女ともメラノサイト腫瘍の登録数が 1983 年頃から急増していた。しかし、1988 年以降は男女ともほぼ横ばいであった。

一方、悪性腫瘍では、男女とも表皮癌が急増し、20 年間で倍増していた。

(7) 表皮癌の主要組織型における部位別割合

基底細胞癌と扁平上皮癌は、ともに顔面の皮膚などの日光露出部に多かった。一方、ボウエン病（表皮内扁平上皮癌）は、浸潤性の扁平上皮癌に比して体幹に多かった。これは、日光露出部の表皮内扁平上皮癌は、日光角化症の亜型（ボウエン様角化症 bowenoid actinic keratosis）と診断される傾向があり、登録から漏れている可能性が示唆された。

(8) 表皮癌の腫瘍組織型における登録数の年次推移

浸潤性扁平上皮癌と基底細胞癌は時に順位が入れ替わりながらも、ほぼ同じように増加していた。また、ときに浸潤癌を発生するボウエン病（表皮内扁平上皮癌）もほぼ同様の傾向で増加していた。

４．結語

広島県腫瘍登録の資料をもとに、1973 年から 2003 年に診断された皮膚腫瘍について解析した。良性腫瘍は悪性腫瘍の 3 倍以上の登録数があり、組織型別、発生別の特徴が把握できた。今後も登録を継続し、各部位の登録数の推移について観察を続けていくことにしている。